

Japanese Japanはどこへ行くのか ALL ENGLISHがもたらすもの

—ブライアン・フリールの戯曲を通して

Quo vadis, Japan? A Reading of Brian Friel's *Translations*

小 沢 茂

OZAWA Shigeru

キーワード：ALL ENGLISH、ブライアン・フリール、英語教育

ALL ENGLISHというフレーズを、町のあちこちで目にする。英語の授業はもちろん、すべての専門科目を英語で行いますよ、という大学や学部の宣伝文句だ。こうしたカリキュラムは現在花盛りであり、全国各地で実施され、多くの受験生を集めている。「意識の高い」高校生にとっては、もはやALL ENGLISHでなければ魅力はない、旧態依然とした日本語の授業では受験してくれないぞ、という声も聞かれる。少子化によって年々小さくなっていくパイの争奪戦というだけでなく、トップクラスの大学では、研究、教育の国際的競争力を高めるという意図もあるようで、文部科学省はスーパー・グローバル大学と称し、「世界レベルの教育研究を行うトップ大学や国際化を牽引するグローバル大学」への多額の助成金を配分している。この審査基準には「外国語による授業科目数・割合」、「外国語のみで卒業できるコースの数等」が含まれるから、いきおい、ALL ENGLISHの授業が増えることになる。

英語化の流れはもとはといえば経済界から始まったようにも思える。楽天株式会社、株式会社ファーストリテイリング（株式会社ユニクロの親会社）などは、社内の英語公用語化をいち早く実現し、日産自動車株式会社、シャープ株式会社なども社内の一部の部署で英語を公用語化するなど、追随する大企業も見られる。優秀な外国人を雇用し、国際的な競争力を高めるためには、日本語に拘泥してはだめだ、ということらしい。さらには、「グローバルランゲージとしての英語を活用せざるを得ない環境を体験できるようにすることで、日本人の英語能力を向上させて、外国人と躊躇なくコミュニケーションできるようにする」として、「公用語を英語とする英語特区」なるものを作り、その中では英語を公用語とする、などといった構想も発表されたことがある。国も民間も、総力を上げてALL ENGLISHの企業、ALL ENGLISHの大学、ひいてはALL ENGLISHの国作りに邁進している感がある。

英語全盛の時代がまさに到来しようとしているわけだが、そうになると日本語はどうになってしまうのだろうか。また、文化と言語が密接に関係しているとするなら、日本の文化は、日本人のアイデンティティはどうになってしまうのだろうか。「日本語は安泰であり、その地位は揺るがない」という見方もあるが、急速な少子化による人口減少と、同じくらい急激な英語化へ

の流れを考えれば、日本語の国内における支配的な地位が危うくなるのも、決して杞憂とは言えない。少なくとも、教育界や経済界においては、将来、日本語より英語が重きをなすようになるだろう。このことが日本の文化や日本人のアイデンティティに大きな影響を及ぼすことは想像に難くない。

ALL ENGLISH政策を積極的に推し進めたことが一因となって、母語がほぼ消滅してしまった国がある。ヨーロッパの西端、英国の隣にあるアイルランドだ。かつて、この国ではアイルランド・ゲール語という言語が話されていたが、1800年ごろからゲール語は国語として崩壊をはじめ、1851年の人口調査では国土の東半分（比較的豊かな地域）から消えてしまい、辺境に追いやられていた（ネトル208-12）。それにとってかわったのが英語であり、それ以降、ゲール語がかつての隆盛を取り戻すことはなかった。現在でも公教育は英語で行われ、人々は英語を話す。ゲール語は小学校では必修だが、実社会で使う場面がないので卒業すると忘れてしまい、話す人はきわめて少ない。ゲールタハトと呼ばれる区域ではゲール語が優勢だが、その面積は非常に小さく、アイルランド全土から見れば、微々たるものでしかない。ゲール語が支配的だった時代のアイルランドをGaelic Irelandと呼ぶが、19世紀にGaelic Irelandは消滅し、大多数が英語を使うALL ENGLISHのEnglish Irelandへと変身してしまったのである。ゲール語復興運動は歴史上何度も繰り返されたが、ついに昔日の栄光を取り戻すことはできなかった。

人口の劇的な減少、急激な英語化への傾倒という言語、文化面での大きな変化に直面している日本の将来を考えるにあたり、19世紀に母語の喪失と英語への転換という同様の現象を経験したアイルランドの例を見るのはきわめて示唆的なことであろう。日本は今、学校でも会社でも皆が日本語を話していたJapanese Japanから、ALL ENGLISHの旗印をかかげ、多くの人が英語で勉強し、英語を使って外国人と一緒に働くEnglish Japanを目指しているように見える。（少なくとも英語特区が実現すれば、その区域は次第にEnglish Japanへと変貌していくことだろう）。果たしてこの流れは歓迎すべきものなのか。母語や文化、アイデンティティへの影響はいかほどのものがあるのか。本論では、19世紀アイルランドの言語環境を題材にした、劇作家ブライアン・フリールの戯曲『トランスレーションズ』（*Translations*）を取り上げ、アイルランドと日本を比較しつつ、日本がどのような道を歩むべきかについて考察する。

長年にわたって栄えたアイルランド・ゲール語が、19世紀に急速に崩壊していったのには、いくつかの複合的な理由がある。ひとつは、1841年に始まったジャガイモ飢饉によって、ゲール語母語話者の数が激減したこと。ジャガイモはアイルランド人の主食であるが、ヨーロッパからやってきた胴枯れ病によって、アイルランド全土のジャガイモは腐ってしまい、食べることができなくなった。こうして、主食を失ったアイルランド人は次々と倒れていったのである。現代の歴史学者によれば、この大飢饉で800万の人口のうち200万が失われたとされる。その上、国内で食うに困った人々はアメリカを初めとして国外に移住していった。故郷を離れざるを得なかった人々は100万を越したとされる。このようにして、ゲール語母語話者が減少し、残った者もアメリカ移住のために必死で英語を勉強し、子どもにも英語を教えたから、ますますゲール語を話す者は少なくなっていった。少子高齢化で日本語母語話者が減る一方の日本にとっても、他人事ではない。

19世紀に起こった言語崩壊の原因は、ジャガイモ飢饉による人口減少だけではない。1831年、アイルランド全土にわたって国民学校（national school）が創設され、授業はすべて英語で行われることになった。それまでアイルランド人はゲール語で教育を受けていたから、国民学校の創設は、日常言語と教育言語が乖離していくことを意味していた。高等教育を受け、出世するには英語を身につけなければならない。こうして、英語は大飢饉の以前に既に、ゲール語に対して優位な地位を占めていたのである。高等教育でALL ENGLISHが盛んに喧伝される日本は、19世紀アイルランドときわめて類似している。この「グローバル化」と称する英語化の流れが容易に止まらないものだとなれば、スーパーグローバル大学以外にもALL ENGLISHを呼号する大学・学部の数はいや増しに増えていくことだろう。ゲール語のように、日本語も消えていく運命にあるのかもしれない。

ジャガイモ飢饉、国民学校の創設に加え、ゲール語の言語崩壊をもたらしたのは、地名の英語化であった。1825年から、英国はアイルランドの測量を開始、高精細な地図を作ると同時に、ゲール語の地名をすべて英語の地名に変更し、新しい英語の地名を公式なものとしたのである。ゲール語は読みにくいし、英語母語話者にとっては発音も難しいから、英語風の地名に変更したわけだ。現代の日本でも、オリンピックを踏まえ、「意味不明な道路標識」を「改善」との名目で、道路案内標識の英訳を変更することになっている。たとえば「国会正門前」はNational Diet Main Gateと変更される。外国人との会話ではこの英語名が使われることになるから、ALL ENGLISHの学生や会社員は、新しい地名を覚えなければならない。少子化で日本人が減り、外国人が増えるとなれば、英語でのコミュニケーションが多くなるから、日本人同士でしか通じない日本の地名を覚えることに何の意味があるのか、ということにもなるだろう。また、英語特区においてはもっと大々的に地名の変更は行われるはずだ。そうなれば、特区以外の地域にも影響が及ぶことは必然である。特区の住民が他地域の話をするときに、昔な

がらの日本語の地名だけしかないのでは、意味がないからである。地名の英語化がなし崩しに行われるとすれば、星が丘の正式名称がStar Hillとなり、「星が丘」は「古くからの現地の住民が勝手に使っている地名」として公式文書から削除され、カーナビゲーションシステムで検索できなくなるのも、そう遠くはないのかもしれない。

当時のアイルランド人は、母語が崩壊しつつある現状をどのように認識していたのだろうか。この問いに答えるために、劇作家のブライアン・フリールが1980年に発表し、世界中で高く評価された演劇『トランスレーションズ』(*Translations*)を取り上げたい。これは、アイルランドが言語崩壊を経験した激動の19世紀を舞台にし、Gaelic IrelandからEnglish Irelandへのターニングポイントを劇化している。この作品では、先述したみつつの要因、すなわち、ジャガイモ飢饉、国民学校の創設、そして地名の英語化がすべて登場し、それに対するアイルランド人のさまざまな反応が描かれている。ほぼ手放しで歓迎する者、かたくなにゲール語、それに結びついたナショナリズムを守ろうとする者、そして、ゲール語、アイルランドの文化を尊重しながら英語化もやむなしという折衷的な態度をとって激動の時期を生きのびようとする者など、多種多様であり、21世紀の日本の影絵のようにも見える。

『トランスレーションズ』の登場人物の反応は、言語、母語をどのようにとらえるかによって、大きく二通りに分けられる。ひとつは、母語は「守るべき文化の基盤」であるという考えであり、いまひとつは、母語が「グローバル化の障害」であるという見方だ。前者の見方をとればALL ENGLISHは自国文化の破壊であるから許されるはずもなく、後者の視点に立てばALL ENGLISHこそ自国繁栄の鍵であり、いたずらに自国語に固執することは亡国への道として非難されることになる。

母語が「守るべき文化の基盤」であるという考え方はナショナリズムと結びつきやすい。アイルランドの場合は1893年にダグラス・ハイドという人物が作ったゲール語同盟がゲール語とアイルランドの伝統文化の復興を掲げ、1916年のイースター蜂起にも大きく影響を与えた。このような事例はアイルランドにとどまるものではなく、他国にも見られることである。たとえばアルフォンソ・ドーデの短編「最後の授業」では、以下のような一節がある。

そこで、アメル先生は、それからそれへと、フランス語についての話をはじめた。フランス語は世界じゅうでいちばん美しい、いちばんはっきりした、いちばんしっかりしたことばであること。だから、ぼくたちで、きちんとまもりつづけ、けっしてわすれてはならないこと。なぜなら、民族がどれいになったとき、国語さえしっかりまもっていれば、じぶんたちの牢獄のかぎをにぎっているようなものなのだから……。 (11)

これは、母語—この場合はフランス語—が「守るべき文化」どころか「民族」そのものの基盤であるという見方を示している。したがって「世界じゅうでいちばん美しい、いちばんはっきりした、いちばん力強い言葉」という過剰なまでに高い自己評価と、国語が「ろう獄のかぎ」、

すなわち他民族による支配を打破し、自由独立を求める運動の基盤となるという見方につながっていく。ゲール語同盟がまさしくこのような母語に立脚する民族主義運動であった（アイルランドの場合、ゲール語復活には至らなかったが）し、戦後でいえば、死語とされていたヘブライ語が復活するというイスラエル建国にまつわる奇跡的な事例も挙げられよう。母語は単なる意思伝達のツールではないというわけである。

『トランスレーションズ』に登場する生垣学校 (hedge school—私設の寺子屋) の校長ヒューの見方も、このようなナショナリズムに基づいたものであるが、彼の場合、ドーデのアメル先生とは違って、意見がやや複雑である。それは、母語に立脚した自国の文化に賛辞を送りつつ、それにあまりにも固執することは、経済的な破滅をもたらすことに気づいているからだ。彼が経営する生垣学校とは一九世紀までのアイルランドに存在した私立学校をいう。当時、アイルランドには国家的な教育制度というものが存在しなかった (Dowling 55-61) ため、わが国の寺子屋のような私塾で教育が行われていたのである。ヒューは、ゲール語文化を高く評価し、アイルランドはギリシア、ローマ、そしてアイルランドの文化の融合という視点からのみ理解されるという。ギリシア、ローマの文化は西洋文明の精華であるから、それらが色濃く残る地域は当然、高い文化水準を持っていると考えられる。ヒューはこのように古典文明を引き合いに出すことでアイルランドの文化を高く評価する一方、ゲール語がアイルランドの「物質的な」生活を弱めていると指摘し、それは劇中の登場人物によって「実証」されることになる。要するに、ゲール語にとらわれているために商業が発展せず、その結果経済的貧困に陥っているわけだ。精神的豊穡と物質的貧困、ゲール語はこのような光と影をもって定義づけられており、ヒューはその両面を理解していると言ってよい。

ヒューはゲール語の精神的豊穡性を信じて疑わない。アイルランドの新しい地図を作る責任者であるランシー中尉との会話を紹介しつつ、彼は自らの言語観を次のように披露する。

HUGH. Indeed . . . he voiced some surprise that we did not speak his language. I explained that a few of us did, on occasion . . . outside the parish of course . . . and then usually for the purposes of commerce, a use to which his tongue seemed particularly suited . . . [Shouts] and a slice of soda bread . . . and I went on to propose that our own culture and the classical tongues made a happier conjugation . . . Doalty?

DOALTY. Conjugo . . . I join together.

HUGH. Indeed . . . English, I suggested, couldn't really express us. (399)

ヒュー その通り、彼は我々が彼らの言語をしゃべらないということを聞いてちょっと驚いていたよ。我々のうちにも必要があれば喋るものもいることは説明しておいた。もちろんこの教区以外の場所にいるときだが、それからたいい商売をする時には使う、なにし

ろ彼らの言葉は商売には特に向いているようだからな。(叫ぶ) それにソーダパンを一枚頼む、で、わしは続けてわがアイルランドの文化と古典語がうまくコンジュゲイションをしたのだと言っておいたよードウルティ、どうだ？

ドウルティ コンジュゴーで、意味は、私は結合させる。〔以下、邦訳は清水重夫による〕

アイルランドの文化と古典的な言語が密接に結びついており、古典語の方が英語よりも特定のテーマを表現するのに適しているというヒューの考えが、彼の教育の基盤となっている。ヒューの意見によれば、古典的文化はアイルランドの現実を示している、というのである。この意見は、英語が低俗なもので、哲学や文学といった抽象的な活動よりは商業に向いている、という認識によって支えられている。ある場面で、ラテン語の韻文を英語に訳した後、彼は「英語にするとどうも……その高貴さが失われますな」(English succeeds in making it sound . . . plebeian) (417) という。また、ワーズワスについて尋ねられたときの返事は「ワーズワースですと？……いや、知らんな。あなたがたの文学にはよく通じておりませんでな、中尉」(Wordsworth? No. I'm afraid we're not familiar with your literature, Lieutenant) (417) というものだ。こうしたせりふは、ヒューが文学に使われる言語としての英語を軽蔑していることを示している。母国の文化的理想をきちんと表現するには母語が最適であるというヒューの意見は理解できよう。英語が「低俗」(plebeian) で、ゲール語が「高貴」(noble) であるかどうかはさらに議論の余地があることと思うが、古典的な文化がアイルランドの地元の文化と結びついているという彼の主張は、アイルランドのナショナリズムを反映している。歴史的に、古典的な文化とアイルランドの文化は密接に結びついていると見られていたからだ。四世紀と五世紀、ギリシア、ローマの学者たちはアイルランドに逃亡していった。大陸の動乱が収まったあと、アイルランドは古典学を中心となったのである。(Cronin 4)。アメル先生のように「世界じゅうで一番すぐれている」とまでは言わないけれども、ギリシャ・ローマの文明の後継者としてのプライドが見え隠れしている。

ヒューは自国の文化を盲目的に称賛するのではなく、その否定的な面も見ている。地図作成チームのヨランド大尉がゲール語を「豊か」(rich) であると賞賛したとき、ヒューは次のように答える。

A rich language. A rich literature. You'll find, sir, that certain cultures expend on their vocabularies and syntax acquisitive energies and ostentations entirely lacking in their material lives. I suppose you could call us a spiritual people. (418)

豊かな言語です。豊かな文学でもあります。語彙やシンタックスにそのエネルギーを使い果たしてしまって、反面、物質的な生活ではどん欲に物を取得したり、誇示したりする力

がなくなる文化もあるんです。私どもは精神的な面を大事にする民族ではないかと思っていますよ。

ここで彼は、アイルランドの人々が、言語そのものを、現実よりも重要視していると指摘するのである。その結果、語彙や統語法が肥大化し、物質的貧困をもたらしてしまう。言語が認識に影響を与えるので、ゲール語を話していると物質的社会では成功できないというわけだ。本当だろうか、と思わず考えてしまうが、ヒューは以下のように言葉を続ける。

Yes, it is a rich language, Lieutenant, full of the mythologies of fantasy and hope and self-deception . . . a syntax opulent with tomorrows. It is our response to mud cabins and a diet of potatoes; our only method of replying to . . . inevitabilities. (418-19)

そう、豊かな言葉ですな、中尉。空想や希望や自己欺瞞の神話でいっぱいですし、シンタックスは明日を表す言葉であふれていますからな。それが泥を塗りたい小屋に住んでじゃがいもを主食としている生活に対する答なんです。私どもの唯一の反応……つまりその、不可抗力に対する答え方ですな。

ヒューは、ゲール語が厳しい現実の代償であること、現実逃避のために作られた言語であることを指摘する。産業が発達せず土地も痩せているアイルランドでは、人々は「幻想」(fantasy)や「自己欺瞞」(self-deception)へと向かっていったのだととらえ、そのような現実逃避の産物であるゲール語を使用することで、ますます現実から乖離していくという悪循環が生じているというのだ。そして、そうした言語に固執することは、否定的な効果を生み出しうると警告するのである。

And it can happen . . . to use an image you'll understand . . . it can happen that a civilization can be imprisoned in a linguistic contour which no longer matches the landscape of . . . fact. (419)

ですから、あなたに理解していただけるようなたとえを使えば、ある文明がある言語の持つ輪郭の中にがんじがらめにされてしまうことがあるのです。ところがその言語はもはやその……現実という風景には適合していないということがありうるのですよ。

そもそも、言語は現実の指標となるべきであって、幻想への逃げ口となるべきではない。ヒューにとって、ゲール語文化全体が「言語という牢獄にとらわれている」(imprisoned in a

linguistic contour)ものなのである。さらに、その言語という牢獄は、もはや時代遅れになってしまっており、現代にはそぐわないものなのだ。この認識は、劇の登場人物モイラと、そのせりふの中に引用されるダニエル・オコンネルの見方と同一である。もしこの考えが実際に真実だとすれば、ゲール語を保持することは悲劇でしかない。しかし、ゲール語を「不可避なものに対してわれわれが反論しうる唯一の方法」(our only method of replying to . . . inevitabilities) (419) だとして、ヒューは現実を捨ててファンタジーへと逃避することを黙認する。

言語が現実逃避の結果でもあり手段ともなりうること、現実の方が言語よりも速く変化してしまい、言語がその変化に追いつけなくなるというのがヒューの指摘だったが、具体的にはどのようなものとして理解すればよいだろうか。劇中に出てくる「神童」ジミー・ジャック・カシーの言動が手がかりになりそうだ。

Jimmy Jack Cassie . . . known as the Infant Prodigy . . . sits by himself, contentedly reading Homer in Greek and smiling to himself . . . For Jimmy the world of the gods and the ancient myths is as real and as immediate as everyday life in the townland of Baile Beag. (383-84)

ジミー・ジャック・カシーは「神童」と呼ばれているが、一人離れて座っていて、ギリシャ語でホメロスの本を読みながら満足そうに一人にたにた笑っている。(中略)ジミーにとっては神々や古代の神話の世界はまさにバリャ・ビョーグの村の日常生活と同じく現実であって、自分の身の回りで起こっているでき事なのである。

ジミーがファンタジーの世界に暮らしていることには疑いの余地はない。もちろん、「神々と古の神話の世界」(world of the gods and the ancient myths) などという世界は実際にはないのであるが、ジミーにとってはそれらは「現実」(real) なのだ。彼はファンタジーと現実を混同してしまっているために、彼とのコミュニケーションはほとんど不可能になっている。彼は「自分一人で座り (中略) ひとりで笑っている」(sits by himself . . . smiling to himself)。このト書きは、彼が自分自身で作り上げた世界の奴隷になってしまっていることを示している。ヒューが言った、現実逃避としての言語、言語を通しての現実逃避という悪循環を、フリールはジミーの姿を通じて具現化しているわけだ。

言語が現実の変化についていけないことは、ヒューが登場する別の場面にも現れている。そこでは彼は村人ドウルティの前でヴェルギリウスの『農事学』の一節「鋤の重みの下で、大地は黒く豊かだ」(Nigra fere et presso pinguis sub vomere terra) や「砕けやすい土壌を持った土地は、穀物には概して最高のものである」(et cui putre solum, - namque hoc imitatur arando - optima frumentis) を引用し、次のように主張する。

JIMMY. Isn't that what I'm always telling you? Black soil for corn. That's what you should have in that upper field of yours . . . corn, not spuds.

DOALTY: Would you listen to that fella! Too lazy be Jasus to wash himself and he's lecturing me on agriculture! (392-93)

ジミー それこそ、いつもわしがみんなに言っていることじゃないかい？ 麦には黒い土だ。そいつこそが、おまえのところの上の畑でつくるものなんだ。じゃがいもじゃなくて麦だよ。

ドウルティ みんな、あいつの言うことを聞こうっていうんだな！ まったくの話、ひどい怠け者で風呂に入ることもしないようなやつが、この俺に農業の講義をしてくれようっていうんだからな！

ジミーの主張は、言語が現実の変化についていけないことの端的な例である。古典ギリシア語にジャガイモを表す単語はない。ジャガイモは1570年前後にヨーロッパに導入された (Salaman 68) のだから、ヴェルギリウスがジャガイモについての記述をすることはできなかったはずである。したがって、古典ギリシア語を使って思考をする限り、ジャガイモを栽培するという発想は浮かばないことになる。ジミーは、穀物を育てるよりも単位面積当たりの収穫量が多いとか、病気に強い (Agrios 19) といった、ジャガイモを育てることの潜在的な利益を考慮することはない。ジミーはヴェルギリウスの記述にあまりにも依存しすぎているために、アイルランドの現在にとって非常に関連性のあるジャガイモの発見という変化を受け入れることができないのである。

『トランスレーションズ』に見られるゲール語をめぐるヒューの意見は、日本語を巡る状況を考える上で非常に示唆に富んでいる。「ある文明がある言語の持つ輪郭の中になんじがらめにされてしまう」というヒューの発言は、日本語にもある程度当てはまるように思われるからだ。アメリカの文化人類学者エドワード・ホールはかつて、「高文脈文化」「低文脈文化」という分類を提唱した。ホールは「人々が互いに深くかわりあっている文化（中略）をコンテクスト化の度合いの高い文化 (high-context cultures) と名付けることにする—においては、簡単なメッセージであっても深い意味を持って伝わってゆく」(52) という。ホールはこの高文脈文化の典型例として日本をあげ、「日本人は、他人の間違いを注意したり、物事をいちいち説明したりはしない。そんなことは当然知っているはずだと思い、知らないで当惑する」(129) と指摘している。日本語は、この高文脈文化と密接に関係している可能性がある。ホール自身は同著の中では日本語について云々していないが、「人類世界で起こっていることで、言語的諸形態に深い影響を受けないものは何もない」(43)、「言語なくしてはコミュニケーションはありえないのであり、それゆえ、文化もコミュニケーションも言語に依存せざるを得ない」

(72)、として、言語が文化に影響する可能性を強く示唆している。事実、ホールの研究をベースとして日本とフィンランドの状況を調査した西村らの考察によれば、日本語のコミュニケーション形式は日本語に深く根付いており、日本語によるコミュニケーションは高文脈なものになる傾向があるという。その要因として、豊富な同音異義語（「貴社の記者は汽車で帰社した」が例示されている）の存在が挙げられ、二人称の代名詞「君」「あなた」「貴様」等々の使用法など、言葉遣いひとつひとつに注意していなければ言外の意味を見落とし、コミュニケーションできないと主張している（790）。日本の高文脈文化は日本語の特質と表裏一体であるというわけで、その点、日本文化は日本語の持つ輪郭の中にながらめになっているという見方もできるであろう。

特定の言語を使うことによって思考や行動に影響が現れることに関しては別の例もある。ガイ・ドイッチャーによれば、オーストラリアの先住民が話すグーグ・イミディル語という言葉には「右」や「左」を表す言葉がなく、すべてを東西南北で表現するという（207）。このような表現ができるためには、常に方位を意識して行動しなければならないが、グーグ・イミディル語母語話者はきわめて優秀な方位感覚を備えているというのである。ドイッチャーは、グーグ・イミディル母語話者の持つすぐれた方位感覚の原因が言語にあると推論している。

いまここで主張しようとしているのは、グーグ・イミディルのような言語が方位感覚と地理座標的記憶を間接的にはぐくむ、ということである。なぜならば、地理座標系においてのみ会話を交わす慣習があるために、話し手はつねに方位を意識し、環境が示す意味ある手がかりにつねに注意を払い、話し手自身の移り変わる方位を鋭敏に記憶することを強いられるからである。ジョン・ハヴィランドの推計によると、グーグ・イミディル語の日常会話には10語に1語（！）の割合で東西南北を示す単語が使われ、しかもきわめて正確な手ぶりを伴うことが多いという。いいかえると、グーグ・イミディル語で日常会話を交わすのは、ごく幼いときから地理的方向感覚の集中訓練を受けるようなものである。自分の位置を知らなければ周囲の人々が話す単純きわまりないことでも理解できないとなれば、四六時中、基本方位を把握し記憶する習慣が身につく。この心的習慣は幼年期から培われるだろうから、まもなく第二の天性となり、とくに努力することもなく無意識に実行できるようになる。（232）

言語の特性によって、その話者は特定の要素—この場合は方位—に、否応なしに注意を払わなければならない。その結果、その特定の要素を認識する能力が発達せざるを得ないというわけだ。逆に言えば、その言語を失ってしまえば、独特の能力もまた失われてしまうことになる。グーグ・イミディル語が英語にとってかわられた現在、先住民たちはもはや先祖たちが持っていた特異な方向感覚を失ってしまっているという（236）。認識の仕方に言語が影響を与えた顕著な例と言えるであろう。

では、日本語はどうだろうか。日本語を使う際には雰囲気や状況、さらに言えば敬語を使う場合などに顕著なことだが上下関係などを否が応でも認識しなければならないから、そのような言語を日常的に使い続けることは認識や行動、態度などに影響してくることは無理からぬことである。グーグ・イミディル語話者がすぐれた方位感覚を身につけると同様、日本語話者は場の雰囲気を読んで行動する能力が発達するという指摘がある。言語社会学者の鈴木孝夫が提唱する「タタミゼ」効果という現象がそれだ。外国人が日本語を学ぶと礼儀正しくなるというのだ (52-66)。高文脈言語を使うことで周囲に気を配るようになり、結果的に礼儀正しいという評価に結びつくのだというわけである。日本語話者は無意識のうちに、日本語の生み出す輪郭にしばられていると言えよう。

言語が現実という風景に適合していないというヒューの指摘は、日本の場合にもあてはまる。たとえば、英語はホールの分類では低文脈言語に分類される。言外の意味は考慮されることなく、すべてを言葉で説明するための言語であり、また、英語によって構成される文化は言語に依存した低文脈社会となる。急速に進むグローバル化は英語を中核とした低文脈文化をいたるところで生み出すわけだが、その現実には日本語はもはや適合していないのではないだろうか。日本語を話すことでわれわれが否応なしに獲得してきた上下関係を捉えて上の者には無条件に従う習性、和をもって尊しとし、相手を思いやって行動する力は、弱肉強食のグローバル社会を生きる上で障害になってしまっているのではないだろうか。ヒューのゲール語観は、現代日本に生きるわたしたちにとっても重く響く。

現実の変化に言語の変化が追いついていないのは、氾濫するカタカナ語にも見ることができる。かつて、日本は文明開化の際、大量に流入してきた西欧の概念に対応する日本語を新造することで、現実と言語とを適合させることに成功した。たとえば明治期に出版された辞書をひもとくと、philosophy という単語に対し「理学」という訳をあてているものがある。やがて「哲学」という訳語が定着したが、要するに江戸の昔には philosophy に対応する概念が存在しなかったのである。明治期に膨大な訳語を作ったから、新たな現実と言語を対応させることができたが、そうせずに日本語にこだわり続けていたら、ちょうど古典ギリシア語でジャガイモに対応する単語がないようなもので、文明開化は果たせなかったであろう。21世紀の現代もまた、明治期同様、西欧の新しい概念が多く入ってきているが、残念なことに日本語をこれらの変化に適合させる努力は十分為されているとは思われない。「アスリート」「リスク」「ケア」「トラブル」「コンシェルジュ」「コンプライアンス」、これらの単語が乱用されるのは苦痛だとしてNHKが訴えられるという事件があったが、こうしたカタカナ語は無理に日本語で置き換えるより、英語のまま通用しているのが現状である。要するに英単語が指し示す概念に相当する、一般的に定着した日本語がない—たとえば「コンシェルジュ」や「コンプライアンス」、ほかにも「クリック」「スワイプ」といったコンピュータ用語に顕著である—わけだが、それを新造することをせず、英語のままカタカナ語として使っているところに、現実の変化に追いついていない問題が浮き彫りになっている。文化にせよ新概念にせよ、新しい時代に適応でき

ない言語に執着することは、新しい時代を正しく認識できず、適応できないことにつながる可能性があるわけで、問題は深刻であると言ってよい。文化の基盤としての言語を捨てることは、ひとつの文化を捨てることである。だが、その言語に固執することで不適応に陥るとすれば、いったいどうするべきなのか。

2

ヒューはゲール語の否定的な面に気づいていながら黙認する姿勢をとっていたが、19世紀のアイランドには、より積極的に行動し、古くなってしまったゲール語を捨てて英語に乗り換えようとする者もあり、この作品にもそのような人物が登場する。たとえば、村の娘モイラはゲール語を無用なものとし、英語をマスターしようとする。

We should all be learning to speak English. That's what my mother says. That's what I say. That's what Dan O'Connell said last month in Ennis. He said the sooner we all learn to speak English the better . . . And what he said was this: "The old language is a barrier to modern progress." He said that last month. And he's right. I don't want Greek. I don't want Latin. I want English. (399-400)

あたしたち、みんな英語がしゃべれるようにならなくちゃいけないんです。うちの母がそう言うんです。あたしも同意見です。先月エニスでダン・オコンネルもそう言いました。あたしたちは英語の話し方を習った方がいい、それも早ければ早いほどいい、って言ったんです。(中略) オコンネルは、「古いアイランド語は現代の進歩には障害となる」って言ったんです。先月のことです。オコンネルが言ったことは正しいんです。あたしにはギリシア語は必要ないんです。ラテン語も必要ないんです。あたしに必要なのは英語なんです。

モイラはゲール語のアイランドに対してもっとも手厳しい意見を浴びせている。彼女は「古い言語」(old language)を、ギリシア語、ラテン語、そしてヒューが教えている古典というローカリズムもろとも捨てさりたいのである。

モイラの主張は遠く離れたアイランドに特有のものではなく、現代の日本の大学生や受験生の意見と似通っていて驚かされる。あたしには文学は必要ないんです。日本語表現も必要ないんです。あたしに必要なのは「生きた英語」なんです。というわけだ。アドバイザー面談や受験の面接などで繰り返し聞かされる言葉である。ある言語がヒューの言ったように現実という景色に適合していない—時代の変化に取り残されている—とすれば、それにこだわることは

障害となる。民族的アイデンティティがその古い言語に支えられているとするなら、古いアイデンティティを保ったままの民族は滅亡する危険性もある。日本語が生み出した高文脈文化はゲール語時代のアイルランド文化同様、高い価値を持っていることは言うまでもない。だが、19世紀のアイルランド人にとって、現実から逃げ続け、夢を見続ける民族が激動の世界で生き残ることができるか、という問題は別であった。同様にわれわれにとっては、礼儀正しく「空気を読む」民族が生き馬の目を抜くグローバル社会で生き延びることができるか、という問いが重くのしかかる。

ローカリズムを捨ててグローバリズムに走るモイラの見方は『トランスレーションズ』の多くの場面に反映されており、当時の人々に広まっている見方だったことが示されている。たとえば、ある場面では、校長の息子メイナスが、彼に手紙の口述筆記を頼んだ村人の様子を次のように話している。

And she got so engrossed in it that she forgot who she was dictating to: “The aul drunken schoolmaster and that lame son of his are still footering about in the hedge-school, wasting people’s good time and money. (389)

で、彼女は話に一生懸命になりすぎて誰に書いてもらっているのか忘れちゃって、「飲んだくれの老校長と足の悪い息子はまだヘッジ・スクールをやっていて、みんなに大事な時間とお金の無駄遣いをさせています」だって。

生垣学校が「みんなの貴重な時間とお金を無駄にしている」(wasting people’s good time and money) と村人が認識しているという事実は、人々が生垣学校を評価しておらず、渋々ながら通っていることの何よりの証拠である。彼女の手紙はまた、よりよい教育がまもなく提供されることになっていることにも触れている。「で、僕はそれを全部書き取っていたんだからね。『ありがたいことに、新しい国民学校が向こうのポール・ナ・クイーラフに建設されています』」(And me taking it all down. ‘Thank God one of them new national schools is being built above at Poll nag Caorach.’ It was after midnight by the time I got back) (389)。「ありがたいことに」(Thank God) というこの表現が示すように、アイルランドの人々は生垣学校よりも、英国によって与えられる教育、英語による教育—グローバリズム—を高く評価しているのである。このような自国の教育への不信と英語圏の国での教育への憧れは、現代日本の大学生、高校生もまた、同じではあるまいか。受験生は入試の面接で判で押したように「生きた英語」を学ぶために「留学したい」という。生きた英語とは何か、と問えば、教科書に載っていない英語、授業で習わない英語です、という。これらの発言の背後にあるのは、日本の学校教育に対する深刻な不信である。日本では「死んだ英語」しか学べないというのだ。さらに国内での教育も価値がないから海外に行く、ということになる。日本で学

ぶことは、メイナスの言葉を借りれば「大事な時間とお金の無駄遣い」というわけだ。作中の村人たちの姿は、現代日本に生きる多くの人々の姿でもある。

モイラやメイナスのせりふは、『トランスレーションズ』の中にある、言語の問題と密接に関係しているもう一つの問題を浮き彫りにしている。国家の教育の問題である。アメリカの批評家であり教育者でもあったニール・ポストマンは「あらゆる主題は言説（中略）の形式をとっており、したがって、ほとんどすべての教育は言語教育なのである。ある主題の知識はたいていの場合、その主題を表現する言語の知識を意味する。たとえば生物学は植物や動物ではなく、植物や動物についての言語なのである。歴史は過去に起こった出来事ではなく、出来事を描写し解釈する言語である。天文学は惑星や星ではなく、惑星や星について議論する特別な方法なのだ」（23）と述べているが、言語が現実を認識し構築するための道具であるとすれば、同様に学問もまた世界を認識し、世界に対峙するための道具である。植物や動物を研究するためには専門の「言語」、生物学を学ぶ必要があり、歴史を認識するためには歴史学、惑星や星への関心を深めるためには天文学という「言語」が必要なのである。教育はそれらの「言語」を子どもたちに教え、世界を一定の方法で認識し、構築することを可能にさせる。しかし、学問が「言語」である以上、ヒューが指摘してきた問題と無縁ではなくなる。その学問は現実という風景から遊離してはいないだろうか。ある問題に対する認識が、学問によってがんじがらめになってしまうことはないだろうか。生け垣学校の場合は既に述べたように、ラテン語、ギリシア語を基礎として、ヴェルギリウスのような古典の作品を教えていた。古典文学が現実を認識し構築する古い「言語」となって、ジミー・ジャック・カシーを幻想の中に閉じこめていたのは既に見た。生け垣学校でなく、国民学校に行っていたら、「神童」と呼ばれるほどのジミーは、英国の大学に進学し、国際的に活躍するエリートになっていたかもしれない。学問、教育は、人間の見方を変え、その一生を大きく左右する。まして公教育ともなれば、その影響は甚大である。生け垣学校の生徒たちがアイルランドのゲール語による伝統的教育という古い「言語」を嫌い、英国による ALL ENGLISH の教育という新しい「言語」を求めていたのは、英語の習得だけでなく、英国の最先端の学問、経済学などの実用的な学問を必要としていたことの表れでもある。ふたつの異なるレベルの「言語」—英語という狭義の言語と教育、学問という広義の言語—が求められていたのだ。

ヒューのもうひとりの息子オウエンは、ヨランドが父の跡を継ごうとしているのに対し、それを否定し、アイルランドに進歩をもたらそうとする。彼が目指すのは言語と現実との完全な一致である。彼はゲール語をどうこうするのではなく、この「風変わりな古風な言葉」を完全に捨てて、「王様がしゃべっている立派な英語」に直し、古くなり、変化についていけない言語を新しい現実に合わせてやろうとする。オウエンの場合、この試みは地名の翻訳という形を取って現れる。その際、彼は英国人の測量部隊に、地名「トバル・ヴリー」(Tobair Vree) の起源を説明した後で、次のように言う。

I know they don't know [the origin]. So the question I put to you, Lieutenant, is this: what do we do with a name like that? Do we scrap Tobair Vree altogether and call it . . . what?...The Cross? Crossroads? Or do we keep piety with a man long dead, long forgotten, his name "eroded" beyond recognition, whose trivial little story nobody in the parish remembers? (420)

誰も〔起源を〕知らないのはわかっているんだよ。それで、中尉、僕はこうあんたに聞きたい。そういう名前について僕らはどう処理していったらいいのだろうか？ トバル・ヴリーなんて名前は全部捨ててしまって、たとえば、クロスとかクロス・ロードとか呼んだらどうだろう？それともずっと昔に死んでしまったもうみんなに忘れられて、元の名前も分からないくらいに「変形」した名前の男、つまらない由来話なんか教区の誰も覚えていないような男のことをずっと尊敬した方がいいというのだろうか？

オウエンの問いは修辞疑問文であり、彼の意見はもちろん「新しい地名にすべきだ」というもので、それが彼が測量部隊に協力して地名を翻訳している理由でもある。ここでオウエンが指摘しているのは、誰も起源を知らない単語は現実という風景に適合していないのであり、そのようなものは排除すべきだ、ということであって、現実と乖離していることを知りながら、過酷な現実から逃避するためには仕方がないとして黙認していた彼の父親ヒューとは正反対である。後に、オウエンと一緒に作業をしている英国人のヨランドが、「どの名前もその起源と完全に一致する」と絶賛しているが、彼らは地名の翻訳で言語と現実の一致という快挙を成し遂げたと確信していたのである。

村人たちの教育批判、オウエンの改革は、現代日本の教育、とりわけ英語教育にも重要な意味を持っている。こんにちの我が国でも、大学教育の評判は必ずしも芳しくない。たとえば文部科学省の有識者会議で「L型大学」と「G型大学」という概念が提案され、話題を呼んだことがある。経営共創基盤CEOの富山和彦氏の提言だが、日本の大学をグローバル人材を育てるグローバル大学（G型大学）と、職業訓練を主とする「L型大学」に分け、一部のトップ校以外は「L型大学」とし、たとえば英文学科ではシェイクスピアや文学概論ではなく、観光業で必要となる英語、地元の歴史、名所の英語説明力をつけるべきだという。このような提言が国の会議で行われること自体、従来の教育に対する不信感の高まりであるが、この背後にあるのは、既に古い教育は日本の現実という風景に適合していない、そのような古い「言語」に執着するのは進歩を阻害する、という、ヒューと同じ認識である。英語教育についても同様の問題がある。明治以来、日本の英語教育は日本語で行われてきた。訳読、文法重視の伝統的な教育方法で、筆者もそうした教育を受け、日々実践しているスタイルである。だが、それは急速に進むグローバル社会という現実の風景に適合しているのか。すでにオウエン流の改革、「言語」を現実には適合させようとする改革は中学校、高等学校で行われ、英語は英語で教えるとい

うのが原則となっている。ネイティブスピーカーの「誰も覚えていないような」規則を覚え、問うことは本当に価値のあることなのだろうか。オウエンのように、「全部捨ててしまって」、現実と「完全に一致する」教育を－そのようなものがあるとして－すべきではないのか。文法という「言語」にがんじがらめになって、オーセンティックな実用的表現ができないのではな
いか。『トランスレーションズ』が問いかける疑問は、英語教育に投げかけられた疑問でもある。

3

言語とナショナリズムが容易に結びつくことは既に述べたが、公用語や教育言語を国家的規模で変更するというような大きな変化の場合、往々にして利益を求める政治的思惑が絡んでいることがある。アイルランドの場合はまさにそれであった。ALL ENGLISHの国民学校創設も、英語による教育、英国流の学問という「言語」をたたき込むことで、アイルランド人の認識を英国寄りにすることが目的のひとつであった。そもそも巨額の予算を組んでまで、英国が反乱を繰り返してばかりいる「問題児」アイルランドの進歩や経済的な向上をはかるわけがなく、その背後には常に局面を自分にとって有利にしようとする政治的なまくろみがあると想定しておかなければならない。地図の作成には別の側面があった。測量の目的について、劇中に登場する測量部隊のリーダー、ランシー中尉は以下のように説明している。

LANCEY. What we are doing is this . . . His Majesty's government has ordered the first ever comprehensive survey of this entire country . . . a general triangulation which will embrace detailed hydrographic and topographic information and which will be executed to a scale of six inches to the English mile. (406)

ランシー 我々がやっているのは次のことです。(中略) 国王陛下の政府はこの国全土にわたる初めての画期的包括的測量を命じました。詳細な水路学的、地誌学的情報を包含する全国的な三角測量によって英国表記の一マイルを六インチの縮尺で示すことになりましょう。

新しい地図は英国の政治的権威「国王陛下の政府」(His Majesty's government)の命令に作られるものであり、当然、できる地図は英国王陛下の意向に添ったものになる。さらに、「詳細な水路学的、地誌学的情報を包含する全国的な三角測量」(a general triangulation which will embrace detailed by hydrographic and topographic information)によって、きわめて正確な情報が記載されることになる。「この巨大な任務は、陸軍当局が大英帝国のこの地

域のあらゆる場所に関して、最新でかつ正確な情報を持つようにするために、始められたものであります」(This enormous task has been embarked on so that the military authorities will be equipped with up-to-date and accurate information on every corner of this part of the empire) (406) という説明もなされている。総合するとどうということになるのか。軍隊は、軍事的な目的のために、常にあらゆる情報を必要としている。だから、最新の、正確な地図を作れば、将来起こりうる英愛戦争で、英国側が有利に立つことができるのである。何しろ、どこの地形がどうなっているか、すべては英国の手の内にあるのだ。現在でも国によっては地図は国家機密、軍事機密扱いであり、特に詳細な地図を作成したり販売したりすることは違法となる。たとえば中国では2010年に、無許可で測量、地図作成を行ったとして日本人が逮捕された事件がある。

ランシー大尉の説明の最後の部分で、彼は「白書」(official British white paper) を引用する。これは英国の公式な見解であると見ることができるだろう。

LANCEY. In conclusion I wish to quote two brief extracts from the white paper which is our governing charter : (Reads) “All former surveys of Ireland originated in forfeiture and violent transfer of property ; the present survey has for its object the relief which can be afforded to the proprietors and occupiers of land from unequal taxation.”

OWEN. The captain hopes that the public will cooperate with the sappers and that the new map will mean that taxes are reduced. (406)

ランシー 最後に我々の行動の基となる原則である白書から簡単に抜粋を二つ引用したいと思います。(読む)「アイルランドにおけるこれまでの測量は没収や暴力的な財産の移管に端を発したものである。今回の測量はその目的とするところは土地の所有者ならびに占有者に不平等の課税のないことを付与するものである。」

この公式な英国の見解は政治的要素に言及していないけれども、目的を「不平等の課税のないこと」(the relief . . . from unequal taxation) として美化することで、この事実を隠蔽している。さらに、この「不平等の課税のないこと」(relief from unequal taxation) そのものが曖昧である。文字通り解釈すれば、税金は平等にされた後で増えるかもしれないし、減るかもしれない。新しい地図が作られた後、税金が減るかどうかは誰にもわからないのである。とりよによって、搾取の曖昧化とも言える。地図の作成は英国にとって、軍事面、税収面で膨大な利益を生むものだったのである。(オウエンは自分自身ではアイルランドの進歩に寄与していると思っていたかもしれないが、その実、英国に利していたわけで、彼はそのことを後々思い知ることになる)。

地図の作成が国民学校の創設同様、英国の政治的な意図に裏打ちされたものであるとすれば、地名がすべて英語になり、それが公式なものになるということも容易に理解できる。軍事作戦を行うのに、読みにくいゲール語の地名は障害以外の何ものでもない。また、税金をとる場合でも、英国側が地形の把握や税の設定をしやすくするには、地名が英語表記であった方が事務的な作業が迅速に進む。英語の地名は必然であったと言えよう。

ALL ENGLISHの国民学校や地図の作成は英国の政策や軍事行動が有利に進むように計画されたものであったが、日本の場合もまた、英語化政策は結果的に、英語圏の国々にとって仕事がしやすいようになってしまっている。たとえば「英語特区」が広まり、企業の公用語が英語になれば、長い目で見れば近い将来English Japanが誕生するかもしれない。だがそれまでの長い過渡期の間、一方的に笑うのは誰か。英語母語話者や外資系企業が仕事をしやすくなり、日本語母語話者は不利益を被ることになる。英語が話せるというだけの理由で、日本人ではなく英語母語話者に仕事に移ってしまう。二世代、三世代かければ、英語を母語とする日本人が生まれるだろうが、それまでの期間を多くの「旧世代」の日本人は生き延びることができるだろうか。英語化政策は短期的に見れば明らかに日本人にとっては不利であり、英語母語話者にとって一方的に有利な効果をもたらすことは考慮しておかなければならない。

「戦争とは武力を使った政治の継続である」とクラウゼヴィッツは言ったが、政治と武力は表裏一体である。公用語が変わるような大きな変化の場合、言語的に優勢な国はたいいてい強大な軍事力を持っているから、簡単に抵抗することはできない。アイルランドと英国の場合もそうであった。劇中では、ナショナリズムに燃え、ALL ENGLISHの動きに対抗しようとする人々も登場する。ドウルティというアイルランド人の登場人物は、意図的に測量を妨害しようとする。もっとも過激な反応はドネリーの双子によるものであり、劇中では、双子がヨランドを殺害したことが暗示される。

サボタージュや暴力による抵抗は、戦略的な見通しがあれば、有効な手段として機能しうるが、盲目的な反抗は蟻螂の斧に似て、無意味というしかない。アイルランド史をひもとけば、たとえばイースター蜂起は戦略的な見通しを持たぬまま、半ば自暴自棄になって起こしたものであり、最初から勝ち目のない戦いであった。『孫子』に説くように、戦いは彼我の戦力差を計算し、必ず勝てるという目算があってから起こすものであり、無駄に兵を失うのは無能な指揮官のすることである。本作品で言えば、測量を妨害したり、作業に携わる英国将校を殺したりするのは、その先に何らの戦略もないわけであるから、やはり無駄な抵抗といわざるを得ない。その結果は凄惨なものとなる。演劇の第三幕では、ヨランド中尉が行方不明になり、ドネリーの双子が彼を殺害したことがほのめかされる。英国軍は極めて暴力的なやり方で彼の搜索を開始する。これは残忍であることは論を待たないが、圧倒的戦力を持つ英国軍に対してテロリズムという形で最初に手を出した以上、この結果を招くのは火を見るよりも明らかであって、今更被害者ぶるのも愚かなことであろう。

DOALTY. You're missing the crack, boys! Cripes, you're missing the crack! Fifty more soldiers arrived an hour ago!

BRIDGET. And they're spread out in a big line from Sean Neal's over to Lag and they're moving straight across the fields towards Cnoc na nGabhar!

DOALTY. Prodding every inch of the ground in front of them with their bayonets and scattering animals and hens in all directions!

BRIDGET. And tumbling everything before them . . . fences, ditches, haystacks, turf-stacks!

DOALTY. They came to Barney Petey's field of corn . . . straight through it be God as if it was heather! (438)

ドウルティ すげえ見物だぜ、みんな！ 本当にすげえ見物だぜ！ 一時間前に兵隊が五〇人増員になったんだぜ。

ブリジッド ション・ニールの酒場のところから大勢の兵隊が一行横隊をつくってラグまで前進して、今度はクノック・ナ・ガーバルに向かって真っすぐに畑を突き進んでいるのよ！

ドウルティ 銃剣で自分の前の地面をやたらに突き刺して、家畜や鶏をそこいらじゅうに蹴散らかしているぜ！

ブリジッド 邪魔になるものは何でも壊しているのよ。生け垣も、堀も、乾草の山も、泥炭の山も手当たり次第よ！

ドウルティ 奴らバーニー・ピーティーの小麦畑のところまで来ると、ヒースの野原を通るみたいに真っすぐ突き進んで行ったんだぜ！

この暴力的な搜索はランシー中尉の指揮によるもので、その命令はきわめて厳しい。彼は村人を集め、以下のように申し渡す。

Lieutenant Yolland is missing. We are searching for him. If we don't find him, or if we receive no information as to where he is to be found, I will pursue the following course of action.

[. . .]

Commencing twenty-four hours from now we will shoot all livestock in Ballybeg . . . At once.

[. . .]

If that doesn't bear results, commencing forty-eight hours from now we will embark on a series of evictions and leveling of every abode in the following

selected areas. . . (439)

ヨランド中尉が行方不明になっている。我々は中尉の探索を行っている。もし中尉の行方が分からない場合、また中尉の居場所について何の情報も得られない場合、以下の行動を取ることにする。

(中略)

今から二十四時間後にバリベグの家畜を全て射殺するものとする。

(中略)

もしそれにも関わらず所期の結果が得られない場合は、今より四十八時間後に、以下の特定地域において一連の強制立ち退きと住居の取り壊しを行うものとする。

この「以下の特定地域」(following selected areas)を、ランシー中尉は「公式な」英語の地名でリストアップする。オウエンは自らが作った「公式」で、「標準的」な英語の地名を、「非公式」で、「非標準的」なゲール語の地名に翻訳せざるを得ない。ここでは、あらたな地図と英語化された地名が、英国軍の軍事行動に極めて大きな影響を与えていることに注意しなければならない。地図と英語の地名がなければ、ここで表現されている家屋立ち退きはずっと難しいものになったであろう。ゲール語のスペリングと発音は外国人が読むには極めて難しいものであるからだ。オウエンが崇拝していた英国が、恩を仇で返す形となり、オウエンは知らず知らずのうちに、老獪な英国に利用されたのである。

“first blood”を流した狂信的アイルランド人たちは、軍事行動という報いを受け、暴力の連鎖が始まっていく。

DOALTY. I've damned little to defend but he'll not put me out without a fight.
And there'll be others who think the same as me.

OWEN. That's a matter for you.

DOALTY. If we'd all stick together. If we knew how to defend ourselves.

OWEN. Against a trained army.

DOALTY. The Donnelly twins know how. (441-42)

ドウルティ 俺には守るものなんてほとんどないが、黙って追い出せると思ったら大間違いだぞ。俺と同じ考えの人間は他にもいるんだからな。

オウエン この土地の人間には大問題だよ。

ドウルティ 俺たちみんなが力を合わせればな。どうやって自分を守るのかが分かれば大丈夫だ。

オウエン 熟練の軍隊が相手なんだよ。

ドウルティ ドネリーの双子ならやり方は知っているさ。

この会話、とくにドウルティの最初の発言からは、確たる勝算もなく、ただ闇雲に戦おうとする姿しか見えてこない。ドネリーの双子は訓練された軍隊に対しての戦い方を知っていると発言しているが、歴史はそれを証明しなかった。マイケル・コリンズに率いられたIRAがゲリラ戦で独立戦争を起こし、勝利したのはかなり後のことである。このような歴史を見ると、ドウルティの強気の発言も、いささか「引かれ者の小唄」に聞こえてしまう。戦いを起こす以上、勝たなければ意味がない。自国のアイデンティティを守るのは大事だが、勝算もなく一億玉砕、撃ちてし止まむといった暴走は、勇ましいものではあるけれども、何ら肯定的な結果を生むものではない。これはアイルランドにとっては悲劇的であった。われわれにとって救いなのは、当時のアイルランドのように、現在の日本は、どこかの国から首筋に刃をつきつけられている状態ではないということであろう。

4

アイルランドは母語の喪失と英語への転換という国難をどのように乗り越えたのか。『トランスレーションズ』は、生け垣学校のヒューが新しく公式なものとなった英語の地名を聞きながら、新たな変化を覚悟するところで終わっている。彼の理想は、和魂洋才ならぬ「愛魂英才」とでもいったもので、ゲール語話者である自分のアイデンティティを保ちつつ、英語でコミュニケーションを行おうというものだ。彼は生け垣学校最後の生徒となったモイラの要求に答え、ゲール語でもギリシャ語でもラテン語でもなく、英語を彼女に教えようとする（彼自身、英国人の測量部隊と自由に英語で会話しているから、英語は話せたようである）。英語の単語と文法をモイラに教えることについて「そんなものでも、心と心をつなぐ助けになるのかな」といったんは疑問に思いつつ「だが、それしか道はない」と決意を固めるのである。「心と心をつなぐ」という以上は、二種類の異なる心があるわけだ。そしてそれは言うまでもなく、アイルランド人の心と英国人、ひいては英語を話す世界中の人々との心である。彼はオウエンのように、完全に英国人になりきることはない。なぜなら、英国人と同じ心になってしまえば、もはや心と心をつなぐ必要はないからである。彼は自分の心—アイルランド人のアイデンティティ—を堅持する覚悟がある。終盤間近、ヒューは次のように述懐する。「われわれはどこに暮らしているのか学ばなければならない。われわれはそれらを自分のものにすることを学ばなければならない。われわれはそれらを新しい故郷にしなければならない」(We must learn where we live. We must learn to make them our own. We must make them our new home) (444). もちろん、第一義的には英語の地名に適応して、それを覚えることを意味している。「われわれはどこに暮らしているのか学ばなければならない」とは、「われわれは『彼らの言語では』どこに暮らしているのか学ばなければならない」という意味である。だが

「われわれは『彼らの考え方・価値観の中では』どこで生きていることになるのか」と補って考えることもできよう。つまり、比喩的には、自分たちの文化や生活は英語ではどのように表せばよいのか、英語の枠組みの中で自分たちの文化や生活を考え、表現すること、すなわち、ゲール語から英語への翻訳の試みとも解釈できる。現に、W. B. イェイツやシェイマス・ヒーニーなどのノーベル賞作家たちも創作の媒体は英語だったが、そこに表されている世界は疑いもなくアイルランドの伝統的な文化であり、社会なのである。彼らはアイルランドの文化を英語で表現し、グローバルなものにすることに成功したのだ。Gaelic Irelandの文化そのものは失われたが、English Irelandの中に「翻訳」されて、その一部分なりとも生き残っているわけである。

English Irelandの誕生は文化的な隆盛と経済的な繁栄という肯定的な側面はあったが、手放しで喜ぶことはできない。ゲール語の口承伝統は失われてしまったし、それに密接に結びついている文化もまた、消えていったからである。金が儲かればよい、ノーベル賞をとればよい、作品の舞台を見に観光客が来てくれればよい、として単純化できる問題ではない。いかなる文化も固有の価値を持っており、それが軍事力を背景にした政策によって一方的に破壊されてしまったとすれば、それは悲劇であって、英語による作品がいくら出たとしても埋め合わせにはならないという見方であろう。また、翻訳によってアイデンティティが保存されたという面はある程度まで見られるだろうが、そもそも文化が言語と密接に関係しているものであるとするなら、文化の翻訳というのは厳密な意味では不可能であり、せいぜいがオリジナルの影のようなものでしかない。

幸いにして日本の場合、アイルランドといくつかの共通点はあったが、政策の背後の軍事力の有無という点だけはアイルランドとは異なっている。日本は独立国家であり、誰かに軍事力で脅されて英語化政策をとっているわけではない。(そうだという論もあるが、ここでは触れない)。独立国家、民主主義国家である以上、国民の意志で政策を決めることができる。アイルランドの場合、Gaelic Irelandの消滅はほとんど必然であった—好き嫌いかかわらず、受け入れなければ武力によって無理にでも従わされたのである。だが日本の場合は違う。Japanese JapanからEnglish Japanに変身するかどうか、国民が主体となって決めることができるのだ。われわれには深刻な問いが投げかけられている。「二兎を追う者は一兎をも得ず」と言われるが、英語と日本語という二兎を追い、Japanese Japanを保持しつつ英語の力をつけるのか、兎は一羽に絞って、English Japanの確立を目指すのか。アイルランドの例を見てもわかるとおり、教育や仕事の場で使われる言語の変更は得られるものも大きいかもしれないが、失われるものも大きい。急激な少子高齢化とグローバル化というふたつの大敵を前に、日本は今、大きな岐路に立たされている。Japanese Japanはどこへ行くのか。ALL ENGLISHに進歩と発展のみを見るのではなく、この難題について、わたしたちひとりひとりが真剣に考えなければならないのではないだろうか。

参考文献

- Agrios, George. *Plant Pathology*. Boston : Elsevier, 2005.
- Andrews, John. “Notes for a future edition of Brian Friel’s Translations.” *Irish Review*, 12 (1992) : 93-106.
- Connolly, Sean. “Dreaming History : Brian Friel’s Translations.” *Theatre Ireland*, 13 (1987) : 42-44.
- Corbert, Tony. *Brian Friel: Decoding the Language of the Tribe*. Dublin : Liffey, 2002.
- Coult, Tony. *About Friel: the Playwright and the Work*. London : Faber, 2003.
- Cronin, Mike. *A History of Ireland*. New York : Palgrave, 2001.
- Daikichi, Irokawa. *The Culture of the Meiji Period*. Trans. Marius Jansen. Princeton : Princeton UP, 1985.
- de Paor, Liam. “Ireland’s Identities.” *The Crane Bag*. 3.1 (1979) : 22-29
- Dowling, P. J. *The Hedge-Schools of Ireland*. Cork : Mercier, 1968.
- Friel, Brian. *Brian Friel: Essays, Diaries, Interviews : 1964-1999*. London : Faber, 1999.
- - - . *Plays One*. London : Faber, 1996.
- - - . *Molly Sweeney*. New York : Dramatists, 1994.
- - - . *Wonderful Tennessee*. London : Faber, 1993.
- Macdonagh, Michael. *The Life of Daniel O’Connell*. London : Cassell, 1903.
- McGrath, F. Charles. *Brian Friel’s (Post) Colonial Drama : Language, Illusion, and Politics*. New York : Syracuse, 1999.
- Moseley, Christopher. ed. *Atlas of the World’s Languages in Danger*, 3rd edn. Paris : UNESCO, 2010. 16 September 2014. <<http://www.unesco.org/culture/en/endangeredlanguages/atlas>>
- Nishimura, Shoji, Anne Nevgi, Seppo Tella. “Communication Style and Cultural Features in High/Low Context Communication Cultures : A Case Study of Finland, Japan and India.” 2008. 5 December 2015. <<http://www.helsinki.fi/~tellanishimuranevgitella299.pdf>>
- Pine, Richard. *The Diviner: The Art of Brian Friel*. Dublin : Newman, 1999.
- Salaman, Redcliffe. *The History and Social Influence of the Potato*. New York : Cambridge UP, 1985.
- Saussure, Ferdinand de. *Course in General Linguistics*. Trans. Roy Harris. Peru : Open Court, 1986.

- 『『外国語乱用で苦痛』NHKを提訴』『リスク』『ケア』『コンシェルジュ』… 岐阜の男性『年配者は分からぬ』『中日新聞』2013年6月26日
- CJムーブメント推進会議編「クールジャパン提言」2014年8月26日、2015年11月30日〈http://www.cas.go.jp/jp/seisaku/cool_japan/cj/dai5/siryou2.pdf〉
- アルフォンソ・ドーデ著、南本史訳『最後の授業』東京：ポプラ社、2007年
- ガイ・ドイッチャー著、棕田直子訳『言語が違えば、世界も違って見えるわけ』東京：インターシフト、2012年
- 国土交通省「道路案内標識における英語表記について」2013年9月12日、2015年11月30日〈http://www.mlit.go.jp/report/press/road01_hh_000377.html〉
- スーパーグローバル大学創成支援プログラム委員会「平成26年度スーパーグローバル大学等事業 スーパーグローバル大学創成支援 審査基準」2014年4月8日、2015年11月30日
- ダニエル・ネトル、スザンヌ・ロメイン著、島村宣男訳『消えゆく言語たち：失われることば、失われる世界』東京：新曜社、2001年
- 高橋朋子著「ダブルリミテッドの子どもたちの言語能力を考える：日本生まれの中国帰国者三世・四世の教育問題」『母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究』3（2007）：27-49
- デイヴィッド・クリスタル著、斎藤兆史、三谷裕美訳『消滅する言語：人類の知的遺産をいかに守るか』東京：中央公論新社、2004年
- 富山和彦「我が国の産業構造と労働市場のパラダイムシフトから見る高等教育機関の今後の方向性」2014年10月7日、2015年12月5日〈http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/061/gijiroku/_icsFiles/fieldfile/2012/10/23/1352719_4.pdf〉
- 内閣府「選択する未来」委員会編「人口動態について（中長期、マクロ的観点からの分析③）」2014年2月14日、2015年11月30日〈http://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/kaigi/special/future/0214/shiryu_04.pdf〉
- 内閣府「選択する未来」委員会編「目指すべき日本の未来の姿について」2014年2月24日、2015年11月30日〈http://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/kaigi/special/future/0224/shiryu_01.pdf〉
- 中島和子「テーマ『ダブルリミテッド・一時的セミリンガル現象を考える』について」『母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究』3（2007）：1-6
- ブライアン・フリール著、清水重夫ほか訳『ブライアン・フリール』東京：新水社、1994年
- 文部科学省「平成26年度スーパーグローバル大学創成支援の公募について（通知）」2014年4月15日、2015年11月30日（http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/sekaitenkai/1346661.htm）
- 和辻哲郎著『ケーベル先生』東京：弘文堂、1948年